

**【区分】**

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

【02】避難所の生活環境

**【教訓情報】**

01. 着の身着のまま避難してきた人々は、厳しい寒さをしのぐためさまざまな手段をとった。しかし、多くの避難所では、火災のおそれや電気容量の問題から暖房器具などが使えなかった。

**【教訓情報詳述】**

01) 着の身着のまま避難してきた人々にとって、耐え難い寒さが続いた。避難者たちは、少しでも暖をとろうと、様々な試みがなされた。

**【参考文献】**

[参考] 兵庫県立芦屋高等学校:防寒用にと、教職員が柔道場の畳を避難者のいる体育館に運び込んだ。[『震災を生きて 記録 大震災から立ち上がる兵庫の教育』兵庫県教育委員会(1996/1),p.45-46]

>

[参考] 神戸市立魚崎小学校:早朝、運動場に集まった避難者(約500人)のなかには、パジャマに上着をはおっただけの人も多い。教員が、防寒用にと体育館から体育用のマットを出して配布をはじめると、多くの避難者が次々にマットを取り出し、あっという間になくなった。[神戸市教育委員会『阪神・淡路大震災 神戸の教育の再生と創造への歩み』(財)神戸市スポーツ教育公社(1996/1),p.63]

---

**【区分】**

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

【02】避難所の生活環境

**【教訓情報】**

01. 着の身着のまま避難してきた人々は、厳しい寒さをしのぐためさまざまな手段をとった。しかし、多くの避難所では、火災のおそれや電気容量の問題から暖房器具などが使えなかった。

**【教訓情報詳述】**

02) 被災した自宅から毛布や衣類、暖房器具などが持ち込まれたが、電気容量の問題や火災の危険性もあることから使用できない器具もあった。神戸市では、電気容量の増設や配線工事を行った。

**【参考文献】**

[引用] (伊丹市立池尻小学校)防寒にと、避難者が持ち込んだコタツ、電熱器、湯沸かしポットなどが一斉に使用された。このため何度もブレーカーが落ち、教職員が使用する電気製品を制限せざるを得なかった。[『災害と対応の記録—阪神・淡路大震災—』伊丹市(1997/3),p.108]

>

[参考] 二次災害の防止や、電気容量の関係で、暖房器具等の持ち込みを禁止した学校が多かったことについては、[『阪神・淡路大震災と神戸の学校教育』神戸市教育委員会(1995/8),p.23]にまとめられている。

>

[参考] 神戸市では、電気容量の増設や配線工事を行った。[『阪神・淡路大震災—神戸市の記録1995年—』神戸市(1996/1),p.214]

>

[引用] (震度7エリア自治体アンケート結果)大きな学校ではよいが、集会所等の小施設では電気容量が不足して電気工事が必要となった。[『平成9年度防災関係情報収集・活用調査(阪神・淡路地域) 調査票』(財)阪神・淡路大震災記念協会(1998/3),p.96]

---

**【区分】**

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

【02】避難所の生活環境

**【教訓情報】**

02. 避難所生活は、特に高齢者にとって困難が多く、避難所肺炎などの健康上の問題も発生した。

### 【教訓情報詳述】

01) 特に避難初期には、高齢者が「避難所に来るのが遅れた」「夜中にトイレに行きやすい」などという理由で、廊下や階段の踊り場で生活せざるを得ない場合もあった。

### 【参考文献】

〔引用〕 体育館や教室に入りきれなかった人は、屋外や風の吹き抜ける廊下や階段の踊り場に身を寄せた。そして立場の弱い高齢者の多くは、「避難所に来るのが遅れた」「夜中にトイレに行きやすい」などという理由で、そのような悪条件下におかれた。〔1.17神戸の教訓を伝える会『阪神・淡路大震災 被災地“神戸”の記録』ぎょうせい(1996/5),p.93〕

>

〔引用〕 ある学校で寒い風の吹きさらしの廊下や階段のところにポツンとおばあさんが座っている。「おばあさん、どないしたの。中へ入ったらいいのに。部屋の中は人息だけでも暖かいよ。」と言ったら、「年取ってトイレが近いから、皆さんが毛布を敷いているところに足の悪いのを引きずって歩いたら迷惑かけるから、トイレに近いところにおります。」と言う。そういう寒い中で一人で辛抱していた老人たちもたくさん見られた。〔震災時のトイレ対策のあり方に関する調査研究委員会『震災時のトイレ対策 - あり方とマニュアル - 』（財）日本消防設備安全センター(1997/3),p.42〕

>

〔引用〕 (被災地市民グループインタビュー結果) 避難所では、お年寄りも隅のほうで布団の山の中に入ってしまったいたり、トイレが近いので入り口の隅のほうで小さくなっていた。とにかく邪魔にならないところに入りたいという状態だった。避難所で風邪をひいて肺炎をおこしたり、仮設のトイレにもものすごく並んでいるので我慢できずに下着を汚してしまうお年寄りもいた。気の毒で、養護施設に定員オーバーのところを無理やり入れてもらった。〔(財)阪神・淡路大震災記念協会『平成11年度 防災関係情報収集・活用調査(阪神・淡路地域)報告書』(2000/3),p.15〕

>

〔引用〕 (被災地市民グループインタビュー結果) 月日が経ってから、『あの頃は少々のは我慢するしかなかった。』という話をよく聞いた。当時は皆口に出さず、しばらくしてから話し出した。だから、当時は弱者を把握できるところまでいかなかった。2週間くらい経ってから、『実は』と、眼鏡や入れ歯、補聴器等が無いという話が聞かれるようになった。〔(財)阪神・淡路大震災記念協会『平成11年度 防災関係情報収集・活用調査(阪神・淡路地域)報告書』(2000/3),p.16〕

---

### 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

【02】避難所の生活環境

### 【教訓情報】

02. 避難所生活は、特に高齢者にとって困難が多く、避難所肺炎などの健康上の問題も発生した。

### 【教訓情報詳述】

02) 高齢者は、寒さによって肺炎を起こしたり(避難所肺炎)、食生活の悪化から衰弱や脱水症状を起こしたりした。

### 【参考文献】

〔引用〕 当時の避難所で病人を救うために必要だったのは通常の医療ではなかった。本当に必要だったのは環境の改善とトイレや食事の介護などの生活支援だった。暖房がなく教室の室温が常に10度以下だった避難所の受診率が平均10.4%だったのに対し、暖房があり室温が15度前後の避難所の受診率は平均3.83%だったという報告もある。〔1.17神戸の教訓を伝える会『阪神・淡路大震災 被災地“神戸”の記録』ぎょうせい(1996/5),p.95〕

>

〔引用〕 避難者数・受診者数から受診率を割り出したデータを解析すると、寒さが避難民(特に高齢者)を直撃していたことが判明した。暖房がなく教室の室温が常に10度以下であったW小学校の受診率は、平均10.4%であった。暖房があり室温が15度前後のX中学校・Y保育園および20～24度のポンプ所の受診率は平均5.0%であり、経時的に受診率は低下した。診療内容の経時変化をみると、暖房のある避難所では2月1日以降急速に感冒の頻度が減少している。暖房のないW小学校では2月以降も感冒の頻度は高くなる傾向を示しており、患者の多くは高齢者であった。〔熊川壽郎『実態調査からの提案～都市直下型震災における高齢者～』『建築士 Vol.44, No.516』(1995/9),p.21-23〕

>

〔引用〕 一日に二百五十人の住民を診察したが、食生活の悪化から、衰弱やお年寄りの脱水症状が目立った。寒いのになぜ脱水か、と初めは訝しく思った。その頃避難所は、断水でトイレが汚れきっていた。小用が間に合わなかったお年寄りは、周囲から「臭い」といわれ、水分の摂取を極端に減らす人が多かった。そのうち高血圧、糖尿病など慢性疾患の悪化が目立つようになり、インフルエンザが蔓延するようになった。〔外岡秀俊『地震と社会(上)』みすず書房(1997/11),p.164〕

>

〔引用〕 音がこもり照明もカクテルライトの体育館は最大で最悪の環境だった。黄色系の照明は高齢者には

視認性が悪く、こもる音は補聴器では判別できにくいため、絶えず緊張を強いた。[中井久夫 他『昨日のごとく 災厄の年の記録』みすず書房(1996/4),p.158]

>

[引用] (被災地市民グループインタビュー結果)ある高齢者は見た目にも分かるくらい体が弱っていた。体育館の中に医者も看護婦もたくさんいたが、遠慮して声をかけて診てもらう事が出来ない。「年寄りはいいいんだ、若い怪我をした人を診て欲しい。」と遠慮がちであった。いよいよだめになって、脱水症状をおこして倒れてしまったこともあった。[(財)阪神・淡路大震災記念協会『平成11年度 防災関係情報収集・活用調査(阪神・淡路地域)報告書』(2000/3),p.15]

>

[引用] プライバシーの問題、室内環境の問題、医療衛生の問題など、応急避難の場とはいえ、非人間的な環境については、改善を図る必要がある。食事等については、配給方式にこだわるのではなく、民間の力を引き出す、あるいは自立を促す視点から、今後は、ボランティアと被災者の協力による自給方式を採用することも考えてほしい。被災者の自発性や自助努力をどう引き出すかの視点からサポートが求められるからである。さらに、精神的なケアの視点からの避難所のあり方の検討が必要と考えられる。[室崎益輝「避難所の設置、運営の課題のあり方」『阪神・淡路大震災 震災対策国際総合検証事業 検証提言総括』兵庫県・震災対策国際総合検証会議(2000/4),p.41]

>

[引用] 震災2週間目以降からは、避難所の集団生活という環境の悪化による肺炎、慢性疾患が報告された。このため、疾病の治療に焦点を当てられていた被災者支援が、医療、福祉、保健の領域を超えた生活を支える体制を地域で構築していく動きへと発展した。[伊藤ゆかり「阪神・淡路大震災以降の医療施策の動向」『減災Vol.1』阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター(2006/4),p.52]

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

[02] 避難所の生活環境

## 【教訓情報】

02. 避難所生活は、特に高齢者にとって困難が多く、避難所肺炎などの健康上の問題も発生した。

## 【教訓情報詳述】

03) 車椅子の被災者は、スペースや段差の関係で避難所生活は困難だった。視覚・聴覚障害者には、救援物資の配布や相談などの情報の入手が難しかった。(「第2期 被災地応急対応, II.被災生活の支援・平常化, B.災害時要援護者への対応」参照)

## 【参考文献】

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

[02] 避難所の生活環境

## 【教訓情報】

02. 避難所生活は、特に高齢者にとって困難が多く、避難所肺炎などの健康上の問題も発生した。

## 【教訓情報詳述】

04) 避難所において、インフルエンザ流行対策として、ワクチンの無償投与が行われた。

## 【参考文献】

[引用] 1月27日からは厚生省指示のもとに全国の医師看護婦が組織的に動員されて、500人規模以上の大型避難所(12ヵ所)には常設の救護所(内5ヵ所は24時間対応)を、その他の避難所(26ヵ所)にも巡回救護班を設置することができ、多くの負傷者等の救護に携わっていただけた。このため、震災負傷者のみでなく、1月下旬から2月上旬にかけて流行の兆しを見せた風邪に対しても機敏に対応でき、大事に至らず経過する事ができた。[『阪神・淡路大震災 神戸復興誌』神戸市(2000/1),p.84-85]

>

[引用] 被災者は寒さの中、避難所での集団生活を強いられた。例年1月、2月はインフルエンザ流行の時期であり、結果的には幸い大流行はなかったが、集団生活での流行を未然に防ぐためとして高齢者を対象に1回のみ予防接種が実施された。[『震災と医療 阪神・淡路大震災の記録』(社)兵庫県医師会(1996/3),p.88]

>

[引用] (兵庫県保健環境部次長兼医務課長 後藤武氏)  
昨年未からインフルエンザ大流行の兆しがあったところでもあり、避難所における予防策として、1月29日から「ワクチン投与」を開始した。  
3万人分用意して、2,627人に投与が行われた。  
[『震災と医療 阪神・淡路大震災の記録』(社)兵庫県医師会(1996/3),p.137]

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

[02] 避難所の生活環境

## 【教訓情報】

02. 避難所生活は、特に高齢者にとって困難が多く、避難所肺炎などの健康上の問題も発生した。

## 【教訓情報詳述】

05) 避難生活の長期化へ対応して、慢性疾患の患者対応、寝たきり防止のための機能訓練等の対応が行われた。

## 【参考文献】

[参考] 震災前後の患者数推移の資料として、国保外来件数の推移が[『震災と医療 阪神・淡路大震災の記録』(社)兵庫県医師会(1996/3),p.139-140]にまとめられている。

>

[引用] (シンポジウムでの神戸市衛生局長 坪井修平氏の発言)  
当初の1週間は外傷とか、風邪が多かったのですけれども、1週間、2週間たちますと、高血圧や糖尿病、胃潰瘍、心筋梗塞など、慢性疾患の患者さんが増えてきました。[『震災と医療 阪神・淡路大震災の記録』(社)兵庫県医師会(1996/3),p.175]

>

[引用] (兵庫県保健環境部次長兼医務課長 後藤武氏)  
救護センター等の受診者の状況を見ると、時間の経過と共に感染症・外傷が減少し、このころから高血圧をはじめとする慢性患者の増加が認められ、また、糖尿病等の検査、治療が避難のために中断される症例も出てきた。  
[『震災と医療 阪神・淡路大震災の記録』(社)兵庫県医師会(1996/3),p.137]

>

[引用] (兵庫県保健環境部次長兼医務課長 後藤武氏)  
高齢の避難者が多いこと、地震により新たな負傷者が増加したこと、避難所が体を動かしたりするのに適した場所でないことから、ねたきり防止対策も必要と考え、1月27日から「巡回機能訓練」を実施した。  
[『震災と医療 阪神・淡路大震災の記録』(社)兵庫県医師会(1996/3),p.137]

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

[02] 避難所の生活環境

## 【教訓情報】

02. 避難所生活は、特に高齢者にとって困難が多く、避難所肺炎などの健康上の問題も発生した。

## 【教訓情報詳述】

06) 避難所における食生活の改善対策として、相談、指導、料理講習会等が行われた。

## 【参考文献】

[引用] 生活環境の急激な変化により、かぜ、下痢、便秘等体調をくずした人からの相談や、高齢者や高血圧等慢性疾患で配布食品がそのままでは食べにくい人に対するの食べ方の工夫等の指導が多かった。そのため、離乳食製品、レトルト食品、栄養補助食品等の提供を業者に依頼し、巡回指導時、配布食品が食べにくい乳幼児や高齢者を中心に配布した。…(中略)…市町対策本部や避難所管理者に、救援物資の効果的な配布や、調理設備の設置を勧奨したり、「非常時用の献立」冊子の作成による炊き出しの献立指導やボランティアによる炊き出し実施場所の調整をする等で、たんぱく質、野菜類を豊富に取り入れたり、温かい料理にするための具体的な助言を行い、避難所の食事内容の格差是正に努め、避難者の食事改善を図った。…(中略)…

さらには、避難所に野菜や牛乳の摂取の勧奨のためのポスターを掲示したり、簡単にできる料理の講習会を開く等で調理意欲をなくしている避難者に対して、調理の自立を促した。  
[『阪神・淡路大震災 兵庫県の1年の記録』兵庫県知事公室消防防災課(1997/7),p.238]

- > [引用] (兵庫県保健環境部次長兼医務課長 後藤武氏)  
20日からは保健所の保健婦や栄養士がチームを組んで避難所を巡回し、必要なケースについての「健康相談、保健指導」が開始された。  
[『震災と医療 阪神・淡路大震災の記録』(社)兵庫県医師会(1996/3),p.137]
- > [参考] 神戸市における食生活の改善への取り組みについて、[『阪神・淡路大震災 神戸復興誌』神戸市(2000/1),p.-]にまとめられている。
- > [参考] 芦屋市における食生活の改善への取り組みについて、[『阪神・淡路大震災 芦屋市の記録'95~'96』芦屋市(1997/4),p.-]にまとめられている。
- > [参考] 被災時の栄養士会、栄養士の対応が[『命を支える食生活を守るために』兵庫県栄養士会(1997/5),p.58-63]にまとめられている。

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

[02] 避難所の生活環境

## 【教訓情報】

02. 避難所生活は、特に高齢者にとって困難が多く、避難所肺炎などの健康上の問題も発生した。

## 【教訓情報詳述】

07) 避難所や被災家庭への巡回健康相談が行われた。

## 【参考文献】

[引用] (保健所による巡回健康相談)  
相談内容は概ね次のような状況であった。  
・冬季のため風邪の蔓延がみられたので、適宜、投薬やうがい指導等を実施した。  
・環境の変化による血圧への影響がみられたので、適宜、投薬や医療機関での受診を勧め、経過観察を行った。  
・震災後の急激なストレスのため不眠や不安を訴える者が2～3週間後から増加した。これらの者から状態を十分聞くとともに、必要に応じ精神科チームや臨床心理士チームに繋いだ。  
・寒いため高齢者は布団に座りっぱなし等による機能低下がみられたので、チームに同伴のPT(理学療法士)、OT(作業療法士)による指導がなされた。  
[松原一郎「高齢者の見守り体制整備」『阪神・淡路大震災 復興10年総括検証・提言報告(3/9)』(第3編 総括検証) | 健康福祉分野』兵庫県・復興10年委員会(2005/3),p.154]

> [引用] 被災直後から避難所、被災家庭への訪問活動には…(中略)…他府県の保健師等の応援も得て、巡回健康相談を実施、一人一人に声かけを行い、健康状態の把握、生活環境アセスメントを行っていった。震災のショックはもとより、体育館や公園のテント生活などのなれない避難所での集団生活のため、心身の疲労の蓄積や腰痛、肩こり等が生じやすいことから、気分転換を図り、被災者同士のコミュニケーションを図るため、健康体操やレクリエーションをとり入れた健康教育を実施した。[近田敬子「高齢者の健康づくり・生きがいづくりの推進」『阪神・淡路大震災 復興10年総括検証・提言報告(3/9)』(第3編 総括検証) | 健康福祉分野』兵庫県・復興10年委員会(2005/3),p.124]

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

[02] 避難所の生活環境

## 【教訓情報】

03. 避難所においてはプライバシーが確保できず、避難者に大きなストレスとなった。また照明の問題や空気の汚染など、室内環境衛生も問題となった。

## 【教訓情報詳述】

01) 体育館での集団生活は被災者間の人間関係の形成や相互扶助に有効であったが、一方でプライバシーが確保できないという問題もあった。

## 【参考文献】

[参考] [柏原士郎・上野淳・森田孝夫・編『阪神・淡路大震災における避難所の研究』大阪大学出版

会(1998/1),p.62-63]では、日本建築学会近畿支部によるアンケート調査およびそれと同じ設問を用いて長田区・淡路島において行われたアンケート調査の結果から、避難生活の問題点に関する指摘がまとめられている。これによると、長田区調査ではプライバシーに関する指摘が第4位を占めるなど、プライバシー問題が大きな問題のひとつとしてあげられる。

> [参考] 避難所生活に関する避難所の問題については、[柏原士郎・上野淳・森田孝夫・編『阪神・淡路大震災における避難所の研究』大阪大学出版会(1998/1),p.112-113]にもふれられている。その中では、学校施設の集団生活が「避難者間の人間関係の形成、助け合いに関して有効であった」という評価の一方で、「プライバシー」「人間関係の難しさ」などが問題としてあげられている。

> [参考] [柏原士郎・上野淳・森田孝夫・編『阪神・淡路大震災における避難所の研究』大阪大学出版会(1998/1),p.233-234]では、避難所生活の問題点のひとつとしてプライバシーを取り上げている。この中では、プライバシー確保のために仕切り板などが用いられたことが述べられているが、一方で、避難者同士の間関係形成などの目的で仕切り板を使用しなかった避難所の例もあげられている。

> [引用] (震度7エリア公益法人・市民対応研究者ヒアリング結果)避難所の人びとは、震災による精神的ショックの上に、不自由な避難所生活がもたらすストレスや不眠に悩まされ、心身ともに衰弱状態になっていた。特に初期の避難所では窮屈な状態であったため、ストレスはこの上の無い状態になった。ストレスを感じている一人の行動がさらに他の人のストレスを助長することもしばしばであった。...(中略)...仮設住宅の早期提供など、避難所生活が長期化しないよう配慮することが前提であるが、やむなく長期化するような場合、自立していくための基礎として、ある程度のプライバシーの確保が避難所においても不可欠である。[『平成10年度防災関係情報収集・活用調査(阪神・淡路地域) 報告書』国土庁防災局・(財)阪神・淡路大震災記念協会(1999/3),p.7]

> [引用] (被災地市民グループインタビュー結果)体育館に大勢の避難者が寝泊まりをしている状態であり、例えば女性は下着の着替えなどに非常に困っていた。夜に消灯してから蒲団の中でもぞもぞと着替えていたが、仮の試着室のようなものでもあればよかったという意見があった。(多くの体育館では、更衣室等も避難場所に使用されていた。)[(財)阪神・淡路大震災記念協会『平成11年度 防災関係情報収集・活用調査(阪神・淡路地域) 報告書』(2000/3),p.11]

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

【02】避難所の生活環境

### 【教訓情報】

03. 避難所においてはプライバシーが確保できず、避難者に大きなストレスとなった。また照明の問題や空気の汚染など、室内環境衛生も問題となった。

### 【教訓情報詳述】

02) 避難所におけるプライバシー確保のため、間仕切りなどが配備された。

### 【参考文献】

[参考] 川西市では、卓球の試合用に用いる仕切り板を用いて避難者間の仕切りに使用することとし、必要分を発注した。[『阪神・淡路大震災 川西市の記録 - 私たちは忘れない -』兵庫県南部地震川西市災害対策本部(1997/3),p.189]

> [引用] また、調査などで早急な改善が求められたプライバシー保護のため、間仕切りや更衣室に利用できる段ボール製パネルを配布(70カ所、1万4千枚)した。[『阪神・淡路大震災 - 神戸市の記録1995年 -』神戸市(1996/1),p.213]

> [引用] (柴生進・川西市長のインタビュー発言)  
避難所の体育館で、卓球に使うL字型の仕切り板を枕元に立てて寝るのがはやりまして、必要な数だけ用意しました。

[『阪神・淡路大震災復興誌』[第8巻]2002年度版』(財)阪神・淡路大震災記念協会(2004/3),p.99]

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

【02】避難所の生活環境

### 【教訓情報】

03. 避難所においてはプライバシーが確保できず、避難者に大きなストレスとなった。また

照明の問題や空気の汚染など、室内環境衛生も問題となった。

**【教訓情報詳述】**

03) 照明の明るさが「眠れない」という問題を生み出したほか、寝具の汚れや湿気なども問題となったため、高温乾燥車による毛布乾燥や布団乾燥機の配置なども行われた。

**【参考文献】**

[参考] 避難所における照明環境については、[柏原士郎・上野淳・森田孝夫・編『阪神・淡路大震災における避難所の研究』大阪大学出版会(1998/1),p.222-225]にまとめられている。これによると、震災直後は照明の明るさが被災者に心理的安定(安心)をもたらしたものの、時間の経過とともに「明るくて眠れない」ことが問題となったとされている。

>

[引用] 避難先で生活が長引くにつれて、敷きっぱなしの毛布等が汚れ、湿気を含み、特に幼児、高齢者には健康への影響が懸念された。毛布の日光干しや通風乾燥を指導したが、寒冷期であったことや、物干場が限定され、特に大規模避難所では一部の人が行えなかった。そこで、高温乾燥車を所有する兵庫県ベストコントロール協会と協議し、各保健所が避難所の管理責任者と調整して、2月から毛布乾燥を実施した。しかし、2月時点では手配できる乾燥車は3台(毛布乾燥処理能力:約1,500枚/日)で、しかも人手不足により避難所ごとのニーズの把握が不十分であった。3月から毛布乾燥の要望の把握に努め、市と兵庫県ベストコントロール協会と契約して(毛布交換作業は各避難所で事前に出す毛布への名前、部屋名を書く等の条件付帯で)、5台の乾燥車を各保健所が避難所と調整のうえ配車することになった。小規模避難所については、家電メーカーより寄贈を受けた家庭用布団乾燥機の配置、貸出しをして衛生面の確保に努め、また医科大学学生ボランティアによる毛布の日干しキャンペーンを支援した。[『阪神・淡路大震災—神戸市の記録1995年—』神戸市(1996/1),p.256]

---

**【区分】**

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

[02] 避難所の生活環境

**【教訓情報】**

04. 避難所では、消毒液の配布など衛生対策などが徐々に進められ、仮設シャワーや仮設風呂も設置された。食中毒対策のため、保冷設備の設置や衛生管理指導、細菌検査なども実施されるようになった。

**【教訓情報詳述】**

01) 仮設トイレなどの衛生確保として神戸市では、クレゾール石鹼液などを配布するとともに、1月24日からは他都市の応援を得て759班の作業班を構成、仮設便所などの消毒作業・消毒薬配布を行った。

**【参考文献】**

[参考] 上水道の断水により学校等の避難所のトイレの衛生状態は劣悪なものとなっていた。このため、例えば神戸市の保健所は、クレゾール石鹼液などを配布するとともに、1月24日からは他都市の応援を得て759班の作業班を構成、仮設便所などの消毒作業・消毒薬配布を行った。[『阪神・淡路大震災—神戸市の記録1995年—』神戸市(1996/1),pp.255]

>

[引用] 手指消毒用に配布した逆性せっけんは、説明用リーフレットを同時に配布したものの使用方法が不適切な場合も多かったが、一部避難所に配布したスプレー式消毒薬の使い勝手が良く好評だったとされている。このほか、2月中旬からは、仮設トイレへの消臭剤の定期投入が行われた例もある。[『阪神・淡路大震災の記録 - 東灘保健所の活動報告 - 』神戸市東灘保健所(1996/2),p.112]

>

[参考] 仮設トイレの衛生対策については、[『阪神・淡路大震災の記録 - 東灘保健所の活動報告 - 』神戸市東灘保健所(1996/2),p.112,116,118]にもある。

---

**【区分】**

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

[02] 避難所の生活環境

**【教訓情報】**

04. 避難所では、消毒液の配布など衛生対策などが徐々に進められ、仮設シャワーや仮設風呂も設置された。食中毒対策のため、保冷設備の設置や衛生管理指導、細菌検査なども実施されるようになった。

## 【教訓情報詳述】

02) 自衛隊、ガス事業者、メーカーなどの協力の下、仮設のシャワーや風呂の設置、洗濯機の設置も進められた。ボランティアによる仮設風呂の設置もあった。

## 【参考文献】

[参考] 入浴と洗濯の例は[柏原士郎・上野淳・森田孝夫・編『阪神・淡路大震災における避難所の研究』大阪大学出版会(1998/1),p.228-229]にまとめられている。

> [参考] 神戸市における避難所での仮設シャワーの供用開始は、1月29日からとされている。また、自衛隊による仮設風呂も24日から順次稼働した。[『阪神・淡路大震災－神戸市の記録1995年－』神戸市(1996/1),p.260]

> [参考] 神戸市では、2月に入って洗濯機の設置も行われた。[『阪神・淡路大震災－神戸市の記録1995年－』神戸市(1996/1),p.256]

> [参考] 宝塚市では、メーカー協力の下、計13箇所の避難所に、仮設風呂24台、シャワー3台が設置された。しかしながら、仮設風呂については、管理運営の問題があるため、全ての避難所に設置することはできなかったとされている。[『阪神・淡路大震災－宝塚市の記録1995－』宝塚市役所(1997/3),p.115]

> [引用] (兵庫県)対策本部では、何とか営業再開にこぎつけた被災地近辺の銭湯や入浴設備のある公共施設、それに近郊のゴルフ場などに、風呂の開放をお願いする一方、仮設風呂の設置に取り組むことにした。準備は、仮設風呂を所有している企業の調査から始まった。設置場所の選定は、各市町に依頼したが、その返答がなかなか届かない。思いのほか設置場所の決定は手間取った。ようやく、設置場所が決まっても、いざ設置という段階で、水の確保が思うようにならず、場所の変更を余儀なくされることも再々であった。水はもっぱらタンクローリーで給水することにした。風呂を沸かす熱源の準備もいる。幸い、熱源については関西電力が電気温水機の提供を申し出てくれて助かったが、設置場所に温水機を利用できるだけの電気容量が確保できるか、といった問題も起きてきた。このほか、排水は可能か、設置後の運営管理には誰があたるのか等々、仮設風呂ひとつとっても、実に多くの障害が横たわっているのもであった。こうした障害を一つひとつ乗り越えて、最終的に302基の仮設風呂を設置することができた。[貝原 俊民『大震災100日の記録 兵庫県知事の手記』ぎょうせい(1996/2),p.47-48]

> [引用] ガスの復旧が遅れている地域では、地域の方々に入浴して頂くために、避難所へ車載式のシャワーを巡回させるとともに、大阪ガス施設や他社の用地に仮設風呂を設置した。最終的に準備した風呂、シャワーの利用者は延べ9万人に達した。また、復旧作業の終盤には瓦礫の堆積により作業に着手できない顧客に対して、関連業界の協力を得てLPGによる風呂、厨房用熱源の提供を行った。[『ライフライン地震防災シンポジウム 阪神・淡路大震災に学ぶ』関西ライフライン研究会(1997/6),p.324]

> [参考] (立花小学校)仮設風呂の要望調査実施[『大規模地震時における避難所のあり方に関する研究報告書』尼崎市・(財)あまがさき未来協会(1996/3),p.23]

> [参考] (神戸大学)水道復旧とともに、グラウンドに学生ボランティアグループによる仮設の風呂が設置された。[『大規模地震時における避難所のあり方に関する研究報告書』尼崎市・(財)あまがさき未来協会(1996/3),p.30]

> [参考] (安井小学校)校庭に設置した仮設風呂のため、お風呂券を発行。[『大規模地震時における避難所のあり方に関する研究報告書』尼崎市・(財)あまがさき未来協会(1996/3),p.44]

> [参考] 働いている人は6～7時に集中、高齢者は就寝前と、利用時間が集中した。[『大規模地震時における避難所のあり方に関する研究報告書』尼崎市・(財)あまがさき未来協会(1996/3),p.83]

> [引用] (震度7エリア自治体アンケート結果)温泉を利用した仮設浴場を設置、2週間で完成し、2/2から供用開始した。県からの手配されたユニットバス33台、シャワールーム5基、大型浴槽2基を設置した。その他には市、自衛隊、ボランティア等により公園、小学校などに併せて10カ所程度設置された。[『平成9年度防災関係情報収集・活用調査(阪神・淡路地域) 調査票』(財)阪神・淡路大震災記念協会(1998/3),pp90]

---

## 【区分】

2. 第2期・被災地応急対応(地震発生後4日～3週間)

2-01. 避難所の運営と管理

【02】避難所の生活環境

## 【教訓情報】

04. 避難所では、消毒液の配布など衛生対策などが徐々に進められ、仮設シャワーや仮設風呂も設置された。食中毒対策のため、保冷設備の設置や衛生管理指導、細菌検査なども実施されるようになった。



## 【教訓情報詳述】

03) 季節が移るにつれて食中毒の危険性も増してきたため、避難所への保冷設備を設置するとともに、衛生管理パンフレットが配布されるなど衛生管理指導が行われた。夏場に向けて、細菌検査なども実施された。

## 【参考文献】

[引用] 食品衛生管理のため、冷蔵庫、保冷库等の保冷設備を避難所へ設置した。[『平成7年 兵庫県南部地震 神戸市災害対策本部民生部の記録』神戸市民生局(1996/8),p.18]

>

[引用] (神戸市では)大量の弁当、パン類は関西一円はもとより関東以西の広域から調達された。一部は空輸されたが、市内に入る道路は渋滞を極め、輸送に長時間を要した。また製造年月日不明のものも見受けられた。一方被災者は、当初「次にいつ配食があるか分からない」という不安感や、炊き出しによって食べきれない弁当を長時間保存する人も多く、配食後の補完などにも衛生上の問題が見られるようになった。また、ボランティアによる炊き出しも多く、避難所の食品衛生対策として被災者や避難所の管理者及びボランティアに対し、次の啓発と指導を実施した。[『阪神・淡路大震災－神戸市の記録1995年－』神戸市(1996/1),p.258]

- 1) 被災者各人に対しては製造年月日などを十分確認すること
- 2) 各避難所管理者に対しては、製造者名や製造日付などの無い弁当類のチェック及び賞味期限切れのものは絶対に配食しないこと。また配食前に、味、においなどに異常のないことを複数の人数で確認すること
- 3) 食品、特に弁当類は衛生的な場所に保管すること
- 4) 逆性石鹼液等の消毒薬の配布と未給水下での使用方法の指導
- 5) 調理器具の洗浄、消毒や使い捨て食器の使用、アルコール消毒液の配布
- 6) 炊き出しメニューの選定や食材保管の指導

>

[引用] 神戸市では、炊き出しをしてくれるボランティア向けにリーフレットをつくって衛生面の注意を呼びかけていた。[奥田和子『震災下の「食」 神戸からの提言』日本放送出版協会(1996/11),p.83]

>

[参考] 各避難所等における食品衛生管理についても、対応がとられた。例えば神戸市東灘区では、保健所が避難所の衛生管理状況調査を行い、それに合わせてトイレなどの消毒指導、弁当類の取り扱い指導、炊き出しなどの衛生管理指導などが実施した。[『阪神・淡路大震災の記録 - 東灘保健所の活動報告 -』神戸市東灘保健所(1996/2),p.118]

>

[参考] 大規模避難所に対してはインフルエンザ等かぜ予防用のうがい薬、感冒薬などが配布された[『阪神・淡路大震災の記録 - 東灘保健所の活動報告 -』神戸市東灘保健所(1996/2),p.116]。

>

[引用] 夏場の食中毒シーズンを控え、弁当の衛生確保の徹底を図るため、避難所における弁当の細菌検査を3月12日から開始した。検査結果は製造者に通知し、注意を促すとともに、食中毒菌が検出されるなど好ましくない結果が出た場合は、管轄保健所から、製造所の衛生指導が実施された。また、ライフラインの復旧後の弁当業者の市内製造所への切り換えは、3月10日から徐々に進められた(当初、2業者、合計1万食)。市内製造所については、保健所による製造所のふき取り検査、食品検査を随時実施し、衛生指導の強化を図った。特に検査成績の好ましくない結果が出た場合、通常の施設の立ち入り指導から、常駐監視方式あるいは毎日監視に切り替えを行い、指導を徹底した。[『阪神・淡路大震災－神戸市の記録1995年－』神戸市(1996/1),p.258]

>

[引用] (梅雨・夏対策)

梅雨・夏を迎えるにあたって、毛布に代わる寝具としてタオルケット(一人2枚)39,200枚、扇風機2,439台を配布した。さらに、避難所となっている施設の網戸の設置(75カ所)や防虫剤の配布も行った。また、食中毒防止のため、保冷コンテナ(62基)、保冷库(46基)、冷蔵庫(272台)を設置した。

テント村の梅雨・夏対策としては、暑さ対策用の断熱シート(1,000枚)や雨対策用のブルーシートの配布、浸水防止のための木製パレット(すのこ)の配布も行った。

[『阪神・淡路大震災 - 神戸の生活再建・5年の記録 -』神戸市生活再建本部(2000/3),p.22]